

大正八年、仏国航空団(前編)

横川裕一

Text by Yuichi YOKOKAWA



(行發飼鷄)

場行飛京タ務各

(隊大二第空航)

各務ヶ原における仏国航空団操縦班の教官たち。後列の立ち姿が、ル・フェーブル少佐のように見える。

■はじめに(仏国航空団とは)

約100年前、日本陸軍は運用や製作の航空技術の伝授を目的としてフランスから使節団を招聘、大正8(1919)年1月にその一行の初陣が来日した。フランス側の正式名称は、“Service de l'Armee Japonaise comme instructeur d'aeronautique”「フランス遣日航空教育軍事使節団」である。

この使節団に関しては、いくつかの記事が各書籍やWebなど各所で発表されているが、筆者には全体象がいまひとつ見えていないと感じることから、陸軍書類を中心にして、この使節団についてまとめたものが本記事である。

なお、使節団の日本側名称については、市販書やWebでは「フランス航空教育団」などが見られるが、陸軍書類ではほぼ「仏国航空団」(ごく少数に「仏国飛行団」が用いられている程度)のため、それにしがった。

■発端(近江大演)

大正6年11月、近江で陸軍大演習が施された。計画では14機のモ式(モーリス・ファルマン式)が所沢から近江

に駆けつけるはずであったが、強い西風と発動機故障により、1機もたどり着くことができなかった。その原因に、臨時軍用気球研究会という組織による統制不足、砲兵工廠の発動機製造技術不足などが陸軍内でも指摘されたが、組織として協調を欠き対策まで踏み込んだものに至らなかった。

これを重く見た陸軍大臣は、井上幾太郎少将を交通兵团司令部(当時は、航空兵科はまだ独立しておらず、交通兵团の下に置かれていた)付として、航空に呼び戻してその解決にあたらせた。井上少将は翌大正7年3月に七か条意見書などを提出するなどして、事態収拾を図った。この意見書は次の内容である。

- ・航空兵科を独立すべし
- ・交通兵团より、航空隊を分離すべし
- ・航空部隊の統率機関として、航空兵团長を設けるべし
- ・臨時軍用気球研究会を解散し、航空学校を創設すべし
- ・航空学校の新設とともに、航空第一大隊を移転し、所沢を拡張すべし
- ・航空兵科将校の補充と教育をすべし
- ・陸軍省内に航空局を置き、陸軍大臣

の直属とさせるべし

■外国機購入

前述の七か条には、「器材や教育については、外国機の購入や人員派遣を惜しまず」の理念があり、シベリア出兵(大正7年夏ごろを予定)もあって、器材導入を図った。大正7年4月の「時局の顧慮上至急整備を要する兵器購入」がそれであり、次の購入希望器材について、フランス政府との交渉を開始していた。

- ・飛行機(予備品とも) 約100機
- ・無線電信機 移動式7、飛行機用40
- ・係留気球7
- ・野戦電灯15
- ・飛行機射撃用測遠機40

7月、フランス政府から「目下の事情(大戦中ゆえ)から、即座に応じることは難しいが、できる限りの好意を示す」として、以下の回答があった。

- ・気球4個(および巻揚機2台)をただちに、同3個(同5台)を9月に
- ・サルムソン式飛行機30機(予備品共)については15機を数日のうちに、1ヵ月以内に残り15機を供給可能加えて、「買った飛行機を使えない、

または壊してしまつては元も子もない」として、「新式なる飛行機の取り扱いについて、教授を数名のフランス国将校に委託する方然るべし」の申し出があった。つまり、依頼さえあれば、インストラクターを派遣してもよいという、好意的なものであった。

これが、航空団派遣に繋がっていく。

■派遣要請

大正8(1919)年8月上旬、陸軍は外務省を通じて、フランス政府の好意へ謝意を表すとともに派遣要員として以下の合計4名を申し入れた。

- ・操縦者 1名
- ・発動機取り扱いならびに製作心得あるもの 2名
- ・空中射撃、空中写真、航空通信指導者 1名

この申し入れはフランス政府によってただちに検討され、8月下旬にはフォル大佐を使節団長とすることが決まって、人選も始まった。さらに、日本がフランスに軍用飛行機を多数発注することを希望するとしてうえて、「フランス政府は使節団団員の俸給、生活費、旅費の一切を負担する。」ことが、総理大臣兼陸軍大臣クレマンソーにより告げられた。

すでに戦争終結(11月に、ドイツ降伏)が見えていたのか、人員は多くなり、12月初旬の陸軍書類では「佛国派遣員は、「ホル大佐(筆者注:ママ)以下約60名にして」と、大所帯化していた。

その任期は、3ヵ月が予定された。

■日本側の準備

この派遣に対する陸軍側の組織として、陸軍は臨時航空術委員会を設立し、受け入れと受講要員の準備を行なっている。委員長には井上中將があたり、海軍にもその門戸を開いている。

練習地には所沢や各務ヶ原が決まっており、それなりの準備をしていることが陸軍書類から見る事ができる。各務ヶ原では飛行機格納庫の位置変更(大正7年12月)、所沢では仏国団員用建物の追加(同)、追加その2(大正8年1月)などが、その例である。



【写真1】 来日時の航空団将校。前列向かって右から2人目が副官ラゴン少佐、3人目がフォル大佐。

■来日

大正7年11月下旬にマルセイユ港を船出したフォル大佐ら第一陣(39名)は、翌年1月15日に神戸に上陸、列車にて東京に着いた。23日にはジョセー少佐以下10名からなる第二陣が到着し、27日にはフォル大佐以下27名が天皇に謁見している。来日時の携行器材を、表1に示す。

団員は来日してすぐに、練習地である所沢(1月20日)や各務ヶ原に向かい、視察を行なっている。また、両地以外の練習地候補も団員の視察と日仏間での協議を経て、2月に下志津、3月には新居と三方ヶ原が練習地に決定されている。これらの地では練習地と決まったものの、講堂や格納庫すらもない状態で、急遽、施設整備も行なわれている。例を示せば、下志津ではその決定後、同地に仏国航空団将校用に浴室(6坪)、大便所(7坪)、小便所(7坪)などを急ぎ建設予定(大正8年2月)と決まった。同じ2月には、各務ヶ原の飛行機格納庫側にバラック式の炊事場(6坪)の建設指示も行なわれ、射撃班と爆撃班の練習地となった三方ヶ原では講堂等を建設し、新居町にも仮

表1 来日時の携行器材

内容	機数・台数
スパッド飛行機	4台
ニューポール飛行機	2台
ブレゲー飛行機	1台
ローン発動機	2台
気球係留用自動車	1台
写真器具装置自動車	2台
乗用自動車	2台
航空機用写真機、その他	11梱

設備が大正8年5月に建設されている。

前述のように、当初予定の練習期間は3ヵ月であったが、施設不備もあってすぐさま練習が始められるものではなく、期間不足が明白となった。教育に熱意を示すフォル大佐は陸軍に働きかけ、8月末までに期間延長された。2月中旬の書類で、図1の予定表を見ることができる。

また、それによって航空団員も増増しており、2月15日、3月7日、4月25日に1名ずつが到着。さらに補充員であるラフォン中尉以下7名が6月30日に到着した。この補充員は、当初の3ヵ月の予定を超えて長期滞在となったことで「疲労を覚え、罹病によって、教育が捗捗しくない状態となった」ために行なわれたものである。

P.79へつづく

図1 各班の練習地と練習日程(大正8年2月時点)

班	実施場所	大正8年2月	大正8年3月	大正8年4月	大正8年5月	大正8年6月	大正8年7月	大正8年8月
操縦班	各務ヶ原	第一回		補修飛行	戦闘飛行			
					偵察飛行			
射撃班	静岡県新居町					第二回	補修飛行	戦闘飛行
							偵察飛行	
爆撃班	静岡県三方ヶ原							
偵察観測班	下志津							
機体製作班	所沢							
発動機製作班	東京砲兵工廠							
検査班	東京砲兵工廠							
気球班	所沢							

表2 団員氏名一覧

番号	階級	氏名	日本到着日	叙勲種類	日本出発日	主な任務	主な勤務地	備考
1	砲兵大佐	ジャック・ポール・フォー	Jacques Paul Faure	大正8年1月15日	旭三	大正9年4月12日	団長	東京
2	砲兵少佐	ルイ・オーグスト・ラゴン	Louis Auguste Ragon	大正8年1月15日	旭四	大正8年8月1日	航空団副官	東京
3	工兵少佐	ダニエル・ミシェル・ジョセ	Daniel Michel Josset	大正8年1月23日	旭四	大正9年4月18日	発動機製作	名古屋
4	工兵少佐	ガブリエル・ジャック・ベルス	Gabriel Jacques Vernes	大正8年1月15日	旭四	大正8年7月25日	気球	所沢
5	砲兵少佐	クサビエ・フリューリー	Xavier Flury	大正8年1月15日	旭四	大正8年9月26日	偵察観測	四街道(下志津)
6	騎兵少佐	シャルル・ルファープル	Charles Leferre	大正8年1月15日	旭四	大正8年10月20日	操縦	岐阜
7	歩兵大尉	アントアヌ・ジョアンネ・ペラン	Antonio Joannes Perrin	大正8年1月23日	旭五	大正8年10月14日	空中射撃	新居
8	歩兵大尉	フランス・ジェゼフ・ブアラン	France Joseph Vuarin	大正8年1月23日	瑞五	大正8年10月14日	爆撃	浜松
9	工兵大尉	ミシェル・アンリ・マリウス・ベルニッス	Michel Henri Marius Vernisse	大正8年1月23日	旭六	大正8年8月11日	発動機製作	名古屋
10	砲兵中尉	ユージェヌ・バーネルゼーク	Eugene Vaherseeke	大正8年1月23日	旭六	大正8年12月12日	空中無線電信	四街道(下志津)
11	砲兵中尉	ローベルト・マルセル・ジョン・バラ	Robert Marcel Jean Barat	大正8年3月7日	瑞六	大正8年6月9日	気球	所沢
12	歩兵中尉	ジャン・ボアダツ	Jean Poidatz	大正8年1月15日	旭六	大正8年2月2日	気球	所沢
13	歩兵中尉	アルベルト・ブリッソー	Albert Brissaud	大正8年1月15日	旭六	大正8年10月14日	偵察観測	四街道(下志津)
14	歩兵中尉	レジス・エドワルド・ラフォン	Regis Edouard Lafont	大正8年6月30日	旭六	大正8年10月14日	偵察観測	四街道(下志津)
15	歩兵中尉	ジョルジュ・リシャルゾン	Georges Richardson	大正8年1月15日	旭六	大正8年9月26日	航空団副官	東京
16	騎兵中尉	アルベルト・ド・ケルゴレー	Albert De Kergorlay	大正8年1月15日	旭六	大正8年10月20日	操縦	岐阜
17	砲兵中尉	ジョゼフ・セレー	Joseph Serret	大正8年6月30日	旭六	大正8年10月14日	操縦	所沢
18	工兵中尉	ジュアン・ブウショ	Jean Bouchot	大正8年6月30日	旭六	大正8年11月9日	気球	所沢
19	航空兵中尉	エドワール・ディッケル	Edouard Deckert	大正8年1月15日	旭六	大正9年4月12日	操縦	岐阜
20	騎兵中尉	ピエール・クレマン	Pierre Clemant	大正8年1月15日	旭六	大正8年10月14日	操縦	岐阜
21	航空兵少尉	エティエンヌ・セグラ	Etienne Seguela	大正8年1月15日	旭六	大正9年4月12日	機関術	岐阜
22	航空兵少尉	ジョゼフ・アンリ・ルースト	Joseph Henri Loustau	大正8年1月15日	旭六	大正9年2月8日	機体製作	所沢
23	騎兵少尉	アルフレッド・ガラ	Alfred Galand	大正8年1月15日	旭六	大正8年10月20日	偵察観測	四街道(下志津)
24	輜重兵少尉	ポール・アルマン	Paul Harmand	大正8年1月15日	瑞六	大正8年3月23日		
25	歩兵少尉	フランソワ・ベルタン	Francois Bertin	大正8年1月15日	旭六	大正8年10月14日	操縦	岐阜
26	歩兵少尉	エドワール・ラウール・ド・リクシー	Eduard Raoul De Ricci	大正8年1月15日	旭六	大正8年5月31日	機体製作	所沢
27	歩兵少尉	リュシアン・リコ	Lucian Lacomte	大正8年1月15日	旭六	大正9年3月7日	機体製作	所沢
28	航空兵少尉	レイモン・ウィーネ	Raymond Wivner	大正8年1月15日	旭六	大正8年8月30日	気球	所沢
29	歩兵少尉	ローベル・ユイ・ユゴン	Robert Louis Hugon	大正8年6月30日	旭六	大正8年10月4日	操縦	浜松
30	歩兵少尉	アンリ・ニコラス・アルクウエ	Henri Nicoles Arcouet	大正8年6月30日	旭六	大正9年8月30日	通訳	名古屋
31	歩兵少尉	モーリス・ブロック	Mourice ploog	大正8年1月23日	旭七	大正9年4月12日	発動機製作	名古屋
32	歩兵少尉	ラザール・ギシャール	Lazare Guichard	大正8年1月15日	旭七	大正9年4月12日	発動機製作	名古屋
33	航空兵少尉	ジョルジュ・バラ	Georges Valat	大正8年1月23日	旭七	大正9年4月12日	航空団書記	東京
34	砲兵少尉	マルセル・フルーリー	Marcel Fleury	大正8年1月23日	旭七	大正9年8月11日	発動機製作	名古屋
35	海軍大尉	ルーク・グランメイソン	Lucour Grandmaison	大正8年4月25日	旭五	大正8年9月19日	偵察観測	横須賀
36	工兵准士官	ジャン・バリオー	Jean Barioz	大正8年1月15日	瑞七	大正8年4月10日	気球	所沢
37	工兵准士官	エリー・アンリ	Elie Henry	大正8年1月15日	旭七	大正8年9月13日	気球・機体製作	所沢
38	工兵准士官	アンリ・ジェラル	Henri Gerard	大正8年1月15日	瑞七	大正8年4月10日	気球	所沢
39	航空兵准士官	ポール・バラ	Paul Valat	大正8年1月15日	旭七	大正8年9月13日	航空団書記	東京
40	航空兵准士官	アルトゥール・コルネー	Arthur Cornet	大正8年1月15日	旭七	大正8年7月9日	機関技工	岐阜
41	工兵准士官	アレキシ・デツージュ	Alexis Dezouches	大正8年1月15日	旭七	大正9年2月8日	機体製作	所沢
42	航空兵准士官	ジョルジュ・グーエフォン	Georges Valat	大正8年1月15日	旭七	大正8年10月4日	機関技工	岐阜
43	工兵准士官	グスタブ・アルフォン・ブーリエー	Gustave Alphonse Boulrier	大正8年2月15日	旭七	大正8年10月4日	気球・機体製作	所沢
44	航空兵准士官	ジャック・コルミエ	Jacques Cormier	大正8年1月23日	旭七	大正8年10月4日	発動機製作	名古屋
45	工兵准士官	ポール・ヴィクトル・ルイトルソウ	Paul Victor Louis Trouseau	大正8年6月30日	旭七	大正8年10月4日	気球	所沢
46	工兵准士官	フランソワ・カンタン	Francois Cuentin	大正8年6月30日	旭七	大正8年10月19日	気球	所沢
47	歩兵准士官	ルネー・ブロック	Rene Bloc	大正8年1月15日	旭七	大正9年9月13日	写真	四街道(下志津)
48	航空兵准士官	モーリス・バラ	Marice Valat	大正8年1月15日	旭七	大正9年4月12日	機関術・発動機製作	名古屋
49	歩兵軍曹	ポール・ランスロー	Paul Lancelot	大正8年1月15日	旭七	—	操縦	四街道(下志津)
50	航空兵軍曹	ジョアンネ・デュフォーネル	Joannees Dufournel	大正8年1月15日	旭七	大正8年9月13日	機関技工	岐阜
51	歩兵軍曹	ジョルジュ・アルソ	Georges Alstot	大正8年1月15日	旭七	大正8年10月4日	偵察観測	四街道(下志津)
52	航空兵軍曹	エミール・コロバン	Emile Collombin	大正8年1月15日	旭七	大正8年9月13日	無線電信	四街道(下志津)
53	航空兵軍曹	ポール・マルタン	Paul Maltin	大正8年1月23日	旭七	大正8年9月13日	爆撃	浜松
54	歩兵軍曹	ルイ・ダゴン	Luis Dagon	大正8年1月15日	旭七	大正8年7月9日	写真	四街道(下志津)
55	航空兵軍曹	ジャン・リュエ	Jean Ruet	大正8年1月15日	旭七	—	機関技工	岐阜および四街道(下志津)
56	歩兵軍曹	ジャクトリー・ジェ	Jacques Trisger	大正8年1月15日	旭七	—	航空団書記	東京
57	航空兵軍曹	ピエール・ボンノー	Pierre Bonneau	大正8年1月15日	旭七	—	無線電信	四街道(下志津)
58	航空兵軍曹	ケーリエス	—	大正8年1月15日	—	大正8年5月2日	機関技工	浜松
59	工兵軍曹	モーリス・マルジュレル	Maurice Margeral	大正8年1月15日	瑞七	大正8年12月12日	無線電信	四街道(下志津)
60	航空兵軍曹	クーデル	—	大正8年7月2日	—	大正8年9月13日	機関術	岐阜
61	航空兵軍曹	ジョルジュ・アンジェリー	Georges Angeli	大正8年7月8日	桐七	大正8年10月20日	機関術	所沢
62	航空兵軍曹	レイモン・アルフレッド・ルジェ	Raymond Alfred Lajay	大正8年8月8日	瑞七	大正9年8月11日	機関術	岐阜および所沢
63	航空兵軍曹	ジュアン・ピラ	Jean Pirat	大正8年9月3日	瑞七	大正8年10月24日	機関術	所沢

※出典資料によりカタカナ表記氏名には差異あり。表4とも異なる表記がある。

なお、副官のラゴン少佐は大正8年8月1日に病死（公式発表、真相は自殺）しており、人数としては62人が最大である。全員を表2に示す。

その任務分類を、表3に示す。来日団員は表4に示す班を構成して、それぞれの任務を遂行していく。

■各班の教育内容

大正8年5月の書類から、各班の教育内容を以降に示す。使用器材は、表5のとおりで、その時点での状況を表

表3 第一次補充員までの任務別人員数

おもな任務	人数	備考
団長	1	
副官	2	
書記	3	
通訳	1	
操縦	8	
空中射撃	1	
爆撃	2	
偵察観測	6	
写真	2	
空中無線電信	1	
無線電信	3	
気球	8	ほかに、機体製作兼任2名
機体製作	7	
発動機製作	6	
機関術	6	ほかに、発動機製作兼任1名
機関技工	5	
合計	62	

6に示す。なお、当初に水上機取扱特別班は予定されていなかったが、フォー

任教官のひとりであるブランメーゾン海軍大尉は、こうして4月下旬に来日している。また、軍用鳩研究会も当初計画にはなかった。

以降に、各班の教区内容を略記してみる。なお、陸軍書類で読めない漢字

表5 各班の使用機材（大正8年8月時点）

班	主使用機材	数
操縦班	ニューポール28平方二座機(二式82型、80馬力)	3
	ニューポール23平方二座機(二式81型、80馬力)	3
	ニューポール18平方二座機(二式83型、80馬力)	2
	ニューポール15平方単座機(二式24型、80馬力)	1
	ニューポール15平方単座機(二式24型、110馬力)	3
	ソッピース単座式(ローン80馬力)	6
	ソッピース二座式(クレルジェー130馬力)	9
	スバッド 単座式(イスパノ140馬力)	1
	ニューポール単葉滑走機	2
	モラン単葉滑走機	3
射撃爆撃班	ファルマン海軍飛行機(100馬力)	3
	ソッピース二座式(クレルジェー130馬力)	3
爆撃班	各務ヶ原にて使用の戦闘用飛行機の一部	—
	モーターボート	3
	ソッピース二座式(クレルジェー130馬力)	3
偵察観測班	モーリスファルマン(タイムラー100馬力)	1
	ブレゲー14(300馬力)	2
	モーリスファルマン(タイムラー100馬力)	11
気球班	空中観測予習講堂用器材一式、写真器具一式	—
	フランス製R型気球	5
機体製作班	付属器具 その他	—
	機体製作に必要な材料	—
発動機製作班	製作機械器具一式(但し、日産2機に必要な設備)	—
	製作機械器具一式(但し、日産1基に必要な設備)	—
航空機検査班	機体製作に必要な材料	—
水上飛行機取扱特別班	製作機械器具一式(但し、日産1基に必要な設備)	—
軍用鳩研究会	仏国より持参の標本	—
	(未定)	—
	校舎、器材庫	—

表4 大正8年5月25日時点の陣容

班	主な任地	主任教官	班長	専修員人数	
				陸軍	海軍
航空団	東京	—	—	—	—
操縦班	岐阜県各務ヶ原	騎兵少佐 ル・フェーブル(一般)	工兵少佐 高橋勝為	1回目 16名	1回目 4名
		騎兵中尉 ド・ケルゴレー(地上滑走)		2回目 10名	2回目 1名
		航空兵中尉 デッケル(操縦)			
射撃爆撃班	静岡県新居町(浜名湖畔)	歩兵少尉 ベルタン(操縦)	工兵少佐 赤羽祐之	1回目 8名	1回目 2名
		歩兵大尉 ヘラン		2回目 20名	2回目 同者
爆撃班	静岡県三方原	歩兵大尉 ビュアラン	工兵少佐 赤羽祐之	1回目 6名	1回目 1名
				2回目 10名	2回目 1名
偵察観測班	千葉県下志津原	砲兵少佐 フリュエリー(偵察観測)	砲兵少佐 浅田礼三	64名	2名
		歩兵中尉 プリッソー(写真術)		ほかに、操縦者(12名)	
		砲兵中尉 バンネルゼーク(無線電信術)			
気球班	所沢	騎兵少尉 ガラン(操縦)	工兵少佐 益田 済	54名	2名
		工兵少佐 ベルス			
		砲兵中尉 バラ			
機体製作班	所沢	工兵少佐 ジョッサー	工兵少佐 益田 済	未定(日産2機に必要な人数)	12名
		航空兵少尉 ルーストウ			
		歩兵少尉 ルコント			
発動機製作班	熱田兵器廠	歩兵少尉 ドリキシ	砲兵中佐 笹本菊太郎	未定(日産1基に必要な人数)	8名
		工兵少佐 ジョッサー			
		工兵中尉 ヴェルニス			
航空機検査班	東京砲兵工廠	工兵少佐 ジョッサー	砲兵中佐 笹本菊太郎	28名	7名
		歩兵少尉 ルコント			
		歩兵少尉 ドリキシ			
水上飛行機取扱特別班	所沢、後に神奈川県追浜	工兵少佐 ジョッサー	工兵少佐 益田 済	—	5名
		海軍大尉 ブランメーゾン			
		航空兵少尉 ルーストウ			
軍用鳩研究会	中野	少尉 クレルカン、他 下士2名	軍鳩局長 菅野 ○	(不明)	6名

は○で置き換えていることを了承されたい。

●操縦班 (写真2参照)

- 一、飛行に関する基本的知識を得るため、若干の座学を行なう。
- 二、滑走機にて地上滑走練習を行なわせ、完全に直線滑走できるまで練習を継続させる。
- 三、ニューポール二十八平方メートルにて同乗飛行、ついで単独飛行を行なわせる。
- 四、ニューポール二十三平方メートル(筆者注: 81E2、後の甲式一型)にて、同様に練習させる。
- 五、ニューポール十八平方メートル(筆者注: 83E2、後の甲式二型)にて、同様に練習させる。
- 六、以上の訓練を終えた者のうち技量優秀なる者にはニューポール十五平方メートル(筆者注: 後の甲式三型)にて戦闘訓練飛行(応用飛行)を行なわせ、そのほかの者はソッピーズ二座(筆者注: ママ)にて爆撃偵察飛行を行なわせる。

以上にて、各務ヶ原における本班の教育を終わり次第、射撃班は新居において空中実弾射撃を、爆撃偵察班は三方ヶ原にて実爆弾の投下練習を行なう。

●射撃班 (写真3参照)

本班を二班に分け、第一回は教官教育にして即第二回における指導者となるべき者を教育。第二回は第一回就業者を指導官として教育を実施す。

- 一、射撃に関する一般知識習得の座学
 - 二、地上射撃
 - 三、飛行中、水上固定目標同乗射撃
 - 四、飛行中、水上移動目標同乗射撃
 - 五、飛行中、ほかの飛行機にて牽引せる移動目標単機射撃(各務ヶ原の専門飛行班にて行なわせる)
 - 六、第二回には下志津の専門員も参加予定も、取りやめることあり
- 余談だが、本班では海軍のファルマン式水上飛行機も用いられており、そのうちの「イ五十三号」は、大正8年5月19日、大柴陸軍輜重兵中尉の操縦により、射撃練習中に墜落したことが分かっている。

●爆撃班 (写真4参照)

本班を四回に分け、射撃班同様に教育を行ない、その要領は次。

表6 大正8年5月25日時点の状況

班	状況
操縦班	1. 練習員は各固の技量齊一ならざると器材の豊富ならざるは、練習の経過を渋滞せしめたり。 2. とくに滑走機の不足は、練習中続出したる破損と共に教育の続行を著しく阻碍せり。 3. 教育階梯の前進は、練習員の階級如何に係わらずまったく本人の技量次第にて、即ち、天才教育主義なり故に、或る者は単独飛行に移らんとするに、他者は滑走練習を終わらざるの状態にあり。 4. 然れども、目下は、ほとんど全練習員18平方メートルの単独飛行域に達し、これが練習中にて近日戦闘飛行に移らんとしつつあり。
射撃爆撃班	目下、水上固定目標射撃練習中。
爆撃班	目下、室内練習中。
偵察観測班	5月10日予定教育終了。目下、教育一般実施後の研究報告事項の整理中。来る27日頃より、更に一週間の予定を以て、約3回各地より伝習将校を招集教育せんとする。 本班の教育は、高等教育に非ずして偵察観測に関する初歩的教育にして、即ち、基本教育を実施せるものなり。
気球班	1. 3月中は教科書の翻訳に従事す。 2. 上記の教育事項中、瓦斯発生機以前は教育未了。目下透視図画法の練習中にして、そのほかの課目は教育終了せり。
機体製作班	未だ、着手せず。
発動機製作班	目下、工場の設備中なるも、材料および工場器材が仏人側の要求に充たざるものあり。これらを海外より取り寄せたる後にあらざれば教育開始困難なるを以て、ミッションの事業としては他班の業務終了を以て一先ず練習を打ち切り、更に発動機製作に経験ある2〜3人の仏人に特別傍観して、本班の練習を実施する予定。
航空機検査班	予定のとおり、終了。
水上飛行機取扱特別班	未だ、着手せず。
軍用機研究会	未だ、規則的な教育開始せず。



【写真2】 操縦班において、模擬操縦装置で操作方法を練習する学生と模型を手にする仏人教官(当時の絵葉書から)。

この時代に、すでにこういう模擬装置があったことが分かる一葉で、日本航空協会刊の『それでも私は飛ぶ』のP.32写真と同じものである。



【写真3】 浜名湖畔の新居(大正浜)にての射撃班教官、ペラン大尉(中央パイプ姿)(当時の絵葉書から)。大尉は、任地に独居であった。

- 一、一般知識習得の座学、器具取扱
- 二、〇〇敷布に室内練習
- 三、慣熟飛行練習(空中観念習得)

- 四、擬爆弾投下演習
- 五、実爆弾投下演習(各務ヶ原の爆撃班、これに参加)

●偵察観測班 (写真5 参照)

最初の10日間は幹部教育にして、4月1日以降の練習員の指導者たらしむ練習員を甲乙両班に分け、在来がごとく教育を実施実施す。但し、下士以下の教育は将校教育を妨げない時間において適宜実施。

- ・甲班は、朝7時半から2時間の昼休憩を入れて、午後4時半まで
- ・乙班は、朝8時半から2時間の昼休憩を入れて、午後5時半まで

教育科目は、飛行機搭乗慣熟練習、観測学科の構成 (仏軍の編成概要、空中偵察の原則、空中偵察 (写真偵察)、地上写真の撮影現象、写真学、無線電信器取扱送受信法、地図学、室内射撃修正法、砲台に○同する空中観測○令の研究、室内歩兵連絡演習、野砲射撃の観測、歩兵線表示演習) の通り。

●気球班

はじめの一カ月は練習員をして教科書の翻訳をなさしめ、これにより練習員自身交互に教科書中の事項につき、実施練習を行なわせしむ。練習員を気球の操縦および偵察の両班にわけ、前者には気球の操縦を、後者は主として偵察に関する事項を教授す。

教育科目は、次。

気球瓦斯 (ガス) 学、気球の構造、気球力学、気球操縦法、綱○取扱、気球器材、係留車、一般気象学と航空術との関係、測量、透視画法、気球上○○観測法、地形学、砲兵協定、軍用気球の戦術的用法、ガス発生器、電話および無線電信、観測および偵察実習。

●機体製作班

工場設備を総じて日産二機を標準とし、これに要する人員の教育を行なう。

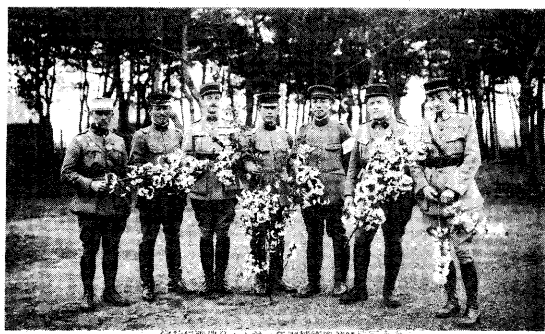
教育は、製図原料品より始め、機体組み立てに至るまできわめて細部にわたり教育を実施し、練習員をして一飛行機機体を完成し得る域に達するまで、教育を継続する予定。

なお、「予定製造機体は、次の予定」として、サルムソン、ニューポール、スパッドが挙げられているが「後者二機は、未だ製造権を買収しあらざるを以って、製作する以前に適当なる手段を講ずるはず。」と注釈が付いている。

陸軍はサルムソン2A2の機体製造権



【写真4】 静岡県三ヶ原、爆撃班のビュラン大尉 (向かって右) とマルタン軍曹 (左)。背景の機体はソッピース複座 (当時の絵葉書から)。



【写真5】 偵察観測班における日仏飛行教官。絵葉書によれば、向かって右から、ブリッソー中尉、バンネルゼック中尉、浅田少佐、四宮中尉、フリュアリー少佐、太田少佐、ガラン少尉で、六方野 (下志津) 臨時航空術練習所のフランス将校教官は、全員いる。手に持っているのは、桜の枝 (当時の絵葉書から)。

を取得していないが、製造権自体については、この時点で考慮していることが窺える。

●発動機製作班

工場設備を総じて日産一機を標準とし、これに要する人員の教育を行なう。

その教育も、材料品より製造組み合わせ、運搬に至るまで、完全なる練習を行なわしむ。

●航空機検査班

練習員を以下の二班に分け、教育す。

一. 機体班

機体製造に要する諸材料の検査、規格、および検査法を教授。

二. 発動機班

発動機製造に要する諸材料、発動機一般理論より始め、製造上の検査法を教授。

●水上飛行機取扱習得班

本班の目的は、水上飛行機の取扱検査法を教授するにありて、大略、以降を教授す。

- 一. 海面の飛行機における取扱検査方法
- 二. 格納庫収容の際における検査方法
- 三. 定期検査法

検査は機体、発動機、および付属品器具全部に亘り実施するものとす。

●軍用鳩研究会

6月1日より各務ヶ原より下士を呼集して、教育を開始す。その期間は6ヵ月とす。

目下近距離の放鳩訓練を行ないつつあるのみ。教育は鳩の飼育法より始め、各方向および異距離より放鳩訓練を行なうものとす。

■前編のまとめ

前述から、教育内容がきわめて広範囲におよんでいることが実感できる。これを諸経費自己負担で実行するフランスには、驚くばかりである。大戦後の自国ステータスの確保と拡大理念に鑑みたものなのだろう。(筆者注: 公然とした) 商売っ気もあっただろう。

対して、日本側はこれだけの規模になるとは想像していなかったはずで、戸惑いつつも、ついていったと思われる。

ただ、大人数が長期間いれば、軋轢が生まれ、停滞もするのは必然。後編では、そのあたりから記していきたい。

(次号の後編へ続く)